

春着

泉鏡太郎

青空文庫

あら玉の春着きつれて酔ひつれて

少年行と前がきがあつたと思ふ……こゝに拜借をしたのは、紅葉先生の俳句

である。處が、その着つれてとある春着がおなじく先生の通帳を拜借によつて

出来たのだから妙で、そこが話である。さきに秋冷相催し、次第に朝夕の寒さと

成り、やがて暮が近つくと、横寺町の二階に日が當つて、座敷の明い、大火鉢の暖い、

鐵瓶の湯の沸つた時を見計らつて、お弟子たちが順々、かく言ふそれがしも、もと

よりで、襟垢、膝ぬけと言ふ布子連が畏まる。「先生、小清潔とまありませんで

も、せめて縞柄のわかりますのを、新年は一枚と存じます……恐れ入りますが、お

帳面を。「また濱野屋か。」神樂坂には、他に布袋屋と言ふ——今もあらう——

呉服屋があつたが、此の濱野屋の方の主人が、でつぱりと肥つて、莞爾々々して居て、

布袋と言ふ呼稱があつた。

が、太鼓腹を突出して、でれりとして、團扇で雛妓に煽がせて居るやうなのではな

い。片膚脱ぎで日置流の弓を引く。獅子寺の大弓場で先生と懇意だから、従つて弟

子たちに帳面が利いた。たゞし信用がないから直接では不可いのである。「去年

の暮くれのやつが盆ぼんを越こして居ゐるぢやないか。だらしく飲のみたがつてばかり居ゐるからだ。「
 「は、今度こんどと言いふ今度こんどは……」 「お株かぶを言いつてら。——此この暮くれには屹きつと入れなよ。」——
 その癖くせ、ふいと立たつて、「一いっしよ所に來きな。」で、通とほりへ出でて、右みぎの濱はまの野屋やで、御自分ごじぶん、めい
 くくに似合にあふやうにお見立みたて下くだすつたものであつた。

此この春着はるぎで、元ぐわんじつ日ひあたり、大たいして酔よひもしないのだけれど、目めつきと足あしもただけは、
 ふうくしこと四五人揃そろつて、神樂坂かぐらざかの通りをはしやいで歩ある行く。……若わかいのが威勢ゐせいがい、
 から、誰だれも（帳面ちやうめん）を着きて居ゐるとは知しらない。いや、知しつて居ゐたかも知しれない。道理だうり
 で、そこらの地内ちないや横町よこちやうへ入はひつても、つきとほしの筭かうがいで、褌つまを取とつて、羽子はねを突ついて
 居ゐるのが、聲こゑも掛かけはしなかつた。割前勘定わりまへかんぢやう。乃すなはち蕎麥屋そばやだ。と言いつても、松まつの内うちだ。
 もりにかけとは限かぎらない。たとへば、小栗せくりがあたり芋いもをすゝり、柳川やながはがはしらを撮つまみ、
 徳田とくたがあんかけを食たべる。お酌しやくなきが故ゆゑに、敢あへて世間せけんは怨うらまない。が、各々おの／＼その懐くわい
 中ちゆうに對たいして、憤懣ふんまん不平ふへい勃勃ぼつ／＼たるものがある。從したがつて氣焰きえんが夥おびしい。

此このありさまを、高たかい二階にかいから先せん生せいが、

あら玉たまの春着はるぎきつれて酔よひつれて

涙なみだぐましいまで、可なつか懐しい。

うしごめ 牛込の方へは、随分しばらく不沙汰をして居た。しばらくと言ふが幾年かになる。このあひだ、水上さんに誘はれて、神樂坂の川鐵（鳥屋）へ、晩御飯を食べに出向いた。もう一人お連は、南榎町へ浅草から引越した万ちやんで、二人番町から歩行いて、その榎町へ寄つて連立つた。が、あの、田圃の大金と仲店のかねだを橋がかりで歩行いた人が、しかも當日の發起人だと言ふからをかしい。途中お納戸町邊の狭い道で、七八十尺切立ての白煉瓦に、崖を落ちる瀑のやうな龜裂が、枝を打つて、三條ばかり頂邊から走りかゝつて居るのには肝を冷した。その眞下に、魚屋の店があつて、親方が威勢のいゝ向願巻で、黄肌縮にさしみ庖丁を閃かして居たのは偉い。……見た處は千丈の峰から崩れかゝる雪雪顔の下で薪を樵るより危かしいのに——此の度胸でないといふ復興は覺束ない。——ぐらくと来るか、おツと叫んで、銅貨の財布と食麵麩と魔法壇を入れたバスケットを追取刀で、一々框まで飛び出すやうな卑怯を何うする。……私は大に勇氣を得た。

が、吃驚するやうな大景氣の川鐵へ入つて、たゞきの側の小座敷へ陣取ると、細露地の隅から覗いて、臆病神が顯はれて、逃路を探せや探せやと、電燈の瞬くばかり、暗い指さしをするには弱つた。まだ積んだまゝの雜具を繪屏風で劃つてある、さ

あお一杯は女中さんで、羅綾の袂なんぞは素よりない。たゞしその六尺の屏風も、
 飛ばばなどか飛ばざらんだが、屏風を飛んでも、駈出せさうな空地と言つては何處を向
 いても無かつたのであるから。……其の癖、酔つた。酔ふといふ心持に陶然とした。
 第一この家は、むかし蕎麥屋で、夏は三階のもの干でビールを飲ませた時分から引
 續いた馴染なのである。——座敷も、趣は變つたが、そのまゝ以前の俤が偲ばれる。：
 ……名ぶつの額がある筈だ。横額に二字、たしか（勤儉）とかあつて（彦左衛門）とし
 て、圓の中に、朱で（大久保）と云ふ印がある。「いかものも、あのくらゐに成ると珍
 物だよ。」と、言つて、紅葉先生はその額が御鼻肩だった。——屏風にかくれて
 居たかも知れない。

まだ思ひ出す事がある。先生がこゝで獨酌……はつけたりで、五勺でうたゝね
 をする方だから御飯をあがつて居ると、隣座敷で盛んに艶談のメートルを揚げる聲が
 する。紛ふべくもない後藤宙外さんであつた。そこで女中をして近所で焼芋を買
 はせ、堆く盆に載せて、傍へあの名筆を以て、曰く「御浮氣どめ」ポンと香つて、三
 筋ばかり蒸氣の立つ處を、あちら様から、おつかひもの、と持つて出た。本草には出で

居まいが、案ずるに焼芋と餡パンは浮氣をとめるものと見える……が浮氣がとまつたか何うかは沙汰なし。たゞ坦懐なる宙外君は、此盆を譲りうけて、其のままに彫刻させて掛額にしたのであつた。

さて其夜こゝへ來るのにも通つたが、矢來の郵便局の前で、ひとりで吹き出した覺えがある。最も當時は青くなつて怯えたので、おびえたのが、尚ほ可笑い。まだ横寺町の玄關に居た時である。「この電報を打つて來た。巖谷の許だ、局待にして、返辭を持つて歸るんだよ。急ぐんだよ。」で、局で、局待と言ふと、局員が字數を算へて、局待には二字分の符號がいる。此のまゝだと、もう一音信の料金を、と言ふのであつた。たしか、市内は一音信金五錢で、局待の分とも、私は十錢より預つて出なかつた。そこで先生の草がきを見ると「ナルナラツネル」一字のことだ。私は考一考して而して辭句を改めた。「ナルナラサガス」此れなら、局待の二字分がきちんと入る、うまいでせう。——巖谷氏の住所は其の頃麴町元園町であつた。が麴町にも、高輪にも、千住にも、待つこと多時にして、以上返電がこない。今時とは時代が違ふ。山の手の局閑にして、赤城の下で鶏が鳴くのをぼかん

と聞いて、うつとりしてゐると、な、め下りの坂の下、あまぎけやの町の角へ、何と、先生の姿が猛然としてあらはれたらうではないか。

唯見て飛出すのと、殆ど同時に「馬鹿野郎、何をして居る。まるで文句が分らないから、巖谷が俵で駈けつけて、もう内へ來てゐるんだ。うつそりめ、何をして居る。皆が、車に

轆かれやしないか、馬に蹴飛ばされやしないかと案じて居るんだ。「私は青くなつた——（居るなら訪ねる。）を——（要るなら探す。）——巖谷氏のわけの分らなかつたのは無

理はない。紅葉先生の辭句を修正したものは、恐らく文壇に於て私一人であらう。そのかはり目の出るほどに叱られた。——何、五錢ぐらゐ、自分の小遣ひがあつたらうと、

串戲をおつしやい。それだけあれば、もう早くに煙草と焼芋と、大福餅になつて居た。煙草五匁、一錢五厘。焼芋が一錢で大六切、大福餅は一、枚五厘であつた。

——其處で原稿料は？……飛んでもない、私はまだ一枚も稼ぎはしない。先生のは——内々知つてゐるが内證にして置く。……

まだ可笑しい事がある、ズツと後で……此の番町の湯へ行くと、かへりがけに、錢湯の亭主が「先生々々」丁ど午ごろだから他に一人も居なかつた。「一寸お教へを

願ひたいのでございますが。」先生で、お教へを、で、私はぎよつとした。亭主極め

て慇懃に「え、(おかゆ)とは何う書きますでせうか。」「あ、其れはね、弓、弓やつて、眞中へ米と書くんです。弱しと間違つては不可いのです。」何と、先生の得意想ふべし。實は、弱を、米の兩方へ配つた粥を書いて、以前、紅葉先生に叱られたものがある。「手前勝手に字を拵へやがつて——先人に對して失禮だ。」その叱られたのは私かも知れない。が、其の時の覚えがあるから、あたりを拂つて悠然として教へた。——今はもう代は替つた——亭主は感心もしないかはりに、病身らしい、お粥を食べたさうな顔をして居た。女房が評判の別嬪で。——此のくらの間違ひのない事を、人に教へた事はないと思つた。思つたなりで年を経た。實際年を経た。つい近い頃である。三馬の浮世風呂を讀むうちに、だしぬけに目白の方から、釣鐘が鳴つて來たやうに氣がついた。湯屋の聞いたのは(岡湯)なのである。

少々話が通りすぎた、あとへ戻らう。

其の日、万ちやんを誘つた家は、以前、私の住んだ南榎町と同町内で、奥へ辨天町の方へ寄つて居る事はすぐに知れた。が、家々も立て込んで、従つて道も狭く成つたやうな氣がする。殊に夜であつた。むかし住んだ家は一寸見富が着かない。

さうだらう 兩側とも生垣つゞきで、私の家などは、木戸内の空地に井戸を取りまいて李の樹が幾本も茂つて居た。李は庭から背戸へ續いて、小さな林といつていゝくらゐ。あの、底に甘みを帯びた、美人の白い膚のやうな花盛りを忘れない。雨には惱み、風には傷み、月影には微笑んで、淨濯明粧の面影を匂はせた。……

唯一間よりなかつた、二階の四疊半で、先生の一句がある。

粉胸の乳房かくすや花李

ひとへに白い。乳くびの桃色をさへ、蔽ひかくした美女にくらべられたものらしい。……此の白い花の、散つて葉に成る頃の、その毛蟲の夥多しきと言つては、それは又な。よくも、あの水を飲んだと思ふ。一釣瓶ごとに榎の實のこぼれたやうな赤い毛蟲を充満に汲上げた。しばらくすると、此の毛蟲が、盡く眞白な蝶になつて、枝にも、葉にも、再び花片を散らして舞つて亂るゝ。幾千とも數を知らない。三日つゞき、五日、七日つゞいて、飜り且つ飛んで、窓にも欄干にも、暖かな雪の降りかゝる風情を見せたのである。

やがて實る頃よ。——就中、南の納戸の濡縁の籬際には、見事な巴旦杏があつて、大きな實と言ひ、色といひ、艶なる波斯の女の爛熟した裸身の如くに薫つて

生つた。いまだと早速千匹屋へでも卸しさうなものを、彼の川柳が言ふ、（地女は振りもかへらぬ一盛り）それ、意氣の壯なるや、縁日の唐黍は買つて嚙つても、内で生つた李なんか食ひはしない。一人として他様の娘などに、こだはるものはなかつたのである。

が、いまは開けた。その頃、友だちが来て、酒屋から麥酒を取ると、泡が立たない、泡が、麥酒は決して泡をくふものはない。が、泡の立たない麥酒は稀有である。酒屋にたゞすと、「抜く時倒にして、ぐんぐんお振りなさい、然うすると泡が立ちますよ、へい。」と言つたものである。十日、腹を瀉さなかつたのは僥倖と言ひたい——今はひらけた。たゞ、惜しい哉。中の丸の大樹の枝垂櫻がもう見えぬ。新館の新潮社の下に、吉田屋と云ふ料理店がある。丁度あの前あたり——其後、晝間通つた時、切株ばかり、根が残つたやうに見た。盛の時は梢が中空に、花は町を蔽うて、そして地摺に枝を曳いた。夜もほんのりと紅であつた。昔よりして界限では、通寺町保善寺に一樹、藁店の光照寺に一樹、とともに、三枚振袖、絲櫻の名木と、稱へられたさうである。

むかがは、向う側の湯屋に柳がある。此間を、男も女も、一頃揃つて、縮緬、七子、羽二

重たへの、黒くろの五いつ紋もんを着きて往ゆき來きした。湯ゆへ行ゆくにも、蕎麥屋そばやへ入はいるにも紋もん着つきだつた事ことがある、こゝだけでも春はるの雨あめ、また朧夜おぼろよの一時いちじ代の面影おもかげが思おもはれる。

ついで、その一時ひとじ代前だいまへには、そこは一面いちめんの大竹藪おほたけやぶで、氣きの弱よわい旗本はたもとは、いまの交か番うばんの處ところまで晝ひるも駈かけ抜ぬけたと言いふのである。酒井家さかゐけに入でいりの大工だいくの、大棟梁おほとうりやうが授さづけられて開拓かいたくした。藪やぶを切きると、蛇へびの棄すて場所ばしよにこまつたと言いふ。小ちひさな堂だうに籠こめて祭まつつたのが、のちに俱樂部くらぶの築山つぎやまの蔭かげに谷たにのやうな崖がけに臨のぞんであつたのを覺おぼえて居ゐる。池いけ、亭ちん、小座敷こざしき、寮れうこのみで、その棟梁とうりやうが一度いちど料理店れうりてんを其處そこに開ひらいた時のなごりだと聞きいた。

棧かけの亭ちんで、遙はるかにポン／＼とお掌てなが鳴なる。へーい、と母家おもやから女中ぢよちうが行ゆくと、……誰たれも居ゐない。池いけの梅うめの小座敷こざしきで、トーンと灰吹はいふきを敲たたく音がする、娘むすめが行ゆくと、……影かげも見みえな
い。——その料理屋れうりやを、狸たぬきがだましたのださうである。眉まゆ唾つば。眉まゆ唾つば。

尤もつともいま神樂坂上かぐらざかうへの割烹かつぱう（魚徳うをとく）の先代せんだいが（威張ゐばり）と呼ばれて、「おう、うめえ魚ものを食くはねえか」と、酔よつはらつて居ゐるから盤臺ばんだいは何處どこかへ忘わすれて、天秤棒てんびんぼうばかりを振ふりまはして歩行あるいた頃ころで、……

矢來邊やらいへんの夜よは、たゞ遠とほくまで、榎町えのきちやうの牛乳屋ぎうにうやの納屋なやに、トーン／＼と牛うしの登あしお

音ねのするするのが響ひびいて、今いまにも——いわしこう——酒井家さかゐけの裏門うらもんあたりで——眞夜まよなか中ちゆうに
 は——鱒いわしこう——と三聲みこゑ呼よんで、形かたちも影かげも見みえないと云いふ。……怪あやしい聲こゑが聞きこえさうな寂さび
 しさであつた。

春はるの夜よの鐘かねうなりけり九人くにん力りき

それは、その李すもの花はな、花はなの李すもの頃ころ、二階にかいの一室いつしつ、四疊よでふはん半はんだから、狭せまい縁えんにも、段はしご子こ
 の上うへの段だんにまで居餘ゐあまつて、わたしたち八人はちにん、先生せんせいと合あはせて九人くにん、一いつ夕せき、俳句はいくくわいの會かい
 のあつた時とき、興きように乗のりじて、先生せんせいが、すゝ色いろの古壁ふるかべにぶつつけがきをされたものである。
 句くの傍かたはらに、おのゝの名ながしるしてあつた。……神樂坂かぐらざかうらへ、私わたしが引越ひっこす時とき、そのまゝ
 残のこすのは惜をしかつたが、壁かべだから何なにうにも成ならない。——いゝ鹽梅あんばいに、一人ひとり知しり合あひがと
 へ入はいつた。——埃ほこりは掛かけないと言いつて、大切たいせつにして居ゐた。

——五月雨さみだれの陰氣いんきな一ある夜よ、坂さかの上うへから飛とび菟かるやうなけたましい聲あしおと音がして、格かう子し
 をがらりと突開つぎあけたと思おもふと、神樂坂下かぐらざかしたの其その新宅しんたくの二階にかいへ、いきなり飛とび上あがつて、
 一いつ驚きやうを吃きつした私の机わたしつくゑまへの前まへでハタと顔かほを合あはせたのは、知合しりあひのその男をとこで……眞青まつさをに
 成なつて居ゐる。「大變たいへんです。」「……」「化ばけものが出でます。」「……」「先せん生せいの壁かべのわ
 きの、あの小窓こまどの處ところへ机つくゑまへを置おいて、勉べん強きやうをして居をりますと……恚かう、じりゝと燈あかりが

暗く成りますから、ふいと見ますと、障子の硝子一杯ほどの猫の顔が、「と、身ぶるひして、「顔ばかりの猫が、李の葉の眞暗な中から——其の大ききと言つたらありません。そ、それが五分と間がない、目も鼻も口も一所に、僕の顔とぴつたりと附着きました、——あなたのお住居の時分から怪猫が居たんでせうか……一體猫が大嫌ひで、いえおそろし可恐いので。「それならば爲方がない。が、怪猫は大袈裟だ。五月闇に、猫が屋根をつたはらないとは誰が言ひ得よう。……窓の燈を覗かないとは限らない。しかし、可恐い猫の顔と、不意に顔合せをしたのでは、驚くも無理はない。……「それで、矢來から此處まで。「えゝ。」と息を引いて、「夢中でした……何しろ、正體を、あなたに伺はうと思つたものですから。」今は昔、山城介三善春家は、前の世の蝦蟇にてや有けむ、蛇なん極く恐ける。——夏の比、染殿の辰巳の山の木隠れに、君達、三人ばかり涼んだ中に、春家も交つたが、此の人の居たりける傍よりしも、三尺許りなる烏蛇の這出たりければ、春家はまだ氣がつかなかつた。處を、君達、それ見よ春家。と、袖を去る事一尺ばかり。春家顔の色は朽し藍のやうに成つて、一聲あつと叫びもあへず、立たんとするほどに二度倒れた。すはだしで、その染殿の東の門より走り出で、北ぎまに走つて、一條より西へ、西の洞院、それから南へ、洞

うゑんさがり
院 下に走つた。家は土御門西の洞院にありければで、駈け込むと齊しく倒れた、
と言ふのが、今昔物語語りに見える。遠きその昔は知らず、いまの男は、牛込南
榎町を東状に走つて、矢來中の丸より、通寺町、肴町、毘沙門前を走
つて、南に神樂坂上を走りおりて、その下にありける露地の家へ飛込んで……打倒れ
けるかはりに、二階へ駈上つたものである。餘り眞面目だから笑ひもならない。「まあ、
おちつ落ちてきたまへ。——景氣づけに一杯。」「いゝえ、歸ります。——成程、猫は屋根づた
ひをして、窓を覗かないものとは限りません。——分りました。——いえ然うしては居ら
れません。僕がキヤツと言つて、いきなり飛出したもんですから、彼が。」と言ふのが情
婦で、「一所にキヤツと言つて、跣足で露地の暗がりを飛出しました。それつ切音信
が分りませんから。」慌てて歸つた。——此の知合を誰とかする。やがて報知新聞の
記者、いまは代議士である、田中萬逸君その人である。反對黨は、ひやかしてやるが
いゝ。が、その夜、もう一度怯かされた。眞夜中である。その頃階下に居た學生さんが、
みしくくと二階へ來ると、寢床だつた私の枕もとで大息をついて、「變です。……どう
も變なんです——縁側の手拭掛が、ふはりと手拭を掛けたまゝで歩行んです。……
トン／＼トン、た／＼らを踏むやうに動きましましたつけ。おやと思ふと斜かひに、兩方へ

開いて、ギクリ、シヤクリ、ギクリ、シヤクリとしながら、後退りをするやうにして、
 あ、あ、と思ふうちに、スーと、あの縁の突あたりの、戸袋の隅へ消えるんです。變だ
 と思ふと、また目の前へ手拭掛がふはりと出て……出ると、トントントンと踏んで、ギ
 クリ、シヤクリ、とやつて、スー、何うにも氣味の悪さつたらないのです。——一度見て
 みて下さい。……矢來の猫が、田中君について來たんぢやあないんでせうか知ら。「五
 月雨はじとくと降る、外は暗夜だ。私も一寸悚然とした。
 は、あ、此の怪談を遣りたさに、前刻狸を持出したな。——いや、敢て然うではな
 い。

何う言ふものか、此のごろ私のおともだちは、おばけと言ふと眉を聳める。
 口惜いから、紅葉先生の怪談を一つ聞かせよう。先生も怪談は嫌ひであ
 った。「泉が、又はじめたぜ。」その唯一つの怪談は、先生が十四五の時、うら
 かな春の日中に、一人で留守をして、茶の室にゐらるゝと、臺所のお竈が見える。：
 ……竈の角に、らくがきの蟹のやうな、小さなかけめがあつた。それが左の角にあつた。が、
 陽炎に乗るやうに、すつと右の角へ動いてかはつた。「唯それだけだよ。しかし今でも
 不思議だよ。」との事である。——猫が窓を覗いたり、手拭掛が踊つたり、竈の蟹が這

つたり、ひよいと賽を振つて出たやうである。春だからお子供衆——に一寸……化も
の雙六。……

なき柳川春葉は、よく罪のない嘘を言つて、うれしがつて、けろりとして居た。――

――「按摩あ……鍼ツ」と忽ち噛みつきさうに、霜夜の横寺の通りで喚く。「あ、あれは
ね（吼え按摩）と云つてね、矢來ぢや（鬮こ）とおんなじに不思議の中へ入るんだよ」

「ふう」などと玄關で焼芋だつたものである。花袋、玉茗、兩君の名が、
そちこち雑誌類に見えた頃、よそから歸つて來るとだしぬけに「きみ、聞いて來たよ。

――花袋と言ふのは上州の或大寺の和尚なんだ、花袋和尚。僧正とも

あるべきが、女のために詩人に成つたんだとね。玉茗と言ふのは日本橋室町の葉茶
屋の若旦那だとき。――この人のいふのだからあてには成らないが、いま座敷うけの新

講談で評判の鳥逕子のお父さんは、千石取の旗下で、攝津守、有鎮とか
いて有鎮とよむ。村山攝津守有鎮――邸は矢來の郵便局の近所にあつて、鳥

逕とは私たち懇意だつた。渾名を鳶の鳥逕と言つたが、厚眉隆鼻ハイカラのクリスチ
ヤンで、そのころ拂方町の教會を背負つて立つた色男で……お父さんの立派

な藏書があつて、私たちはよく借りた。――そのお父さんを知つて居るが、攝津守だ

か、有鎮だか、こゝが柳川の説だから當には成らない。その攝津守が、私の知つてる頃、五十七八の年配、人品なものであつた。つい、その頃、門へ出て——秋の夕暮である……何心もなく町通りを視て立つと、箒目の立つた町に、ふと前後に人足が途絶えた。その時、矢來の方から武士が二人來て、二人で話しながら、通寺町の方へ、すつと通つた……四十ぐらゐのと二十ぐらゐの若侍とで。——唯見るうちに、郵便局の坂を下りに見えなくなつた。あゝ不思議な事かと思ひ出すと、三三幾年の、維新前後に、おなじ時、おなじ節、おなじ門で、おなじ景色に、おなじ二人の侍を見た事がある、と思ふと、悚然としたと言ふのである。

此は少しくもの凄い。……

初春の事だ。おぼけでもあるまい。

春着につけても、一つ艶つばい處をお目に掛けよう。

時に、川鐵の向うあたりに、（水何）とか言つた天麩羅屋があつた。くどいやうだが、一人前、なみで五錢。……横寺町で、お嬢さんの初のお節句の時、私たは此を御馳走に成つた。その時分、先生は御質素なものであつた。二十幾年、尤も私などは、今もつて質素である。此の段は、勤儉と題して、（大久保）の印を捺しても可い。

その天麩羅屋の、しかも蛤鍋三錢と云ふのを狙つて、小栗、柳川、徳田、私……
 宙外君が加はつて、大擧して押上つた、春寒の午後である。お銚子は入が悪く
 つて、しかも高値いと言ふので、式だけ誂へたほかには、町の酒屋から、かけにして番を
 口説いた一升入の貧乏徳利を誰かが外套（註）おなじく月賦……：この
 なのを一着して、のそくと歩行く奴を、先生が嘲つて——月府玄蟬。の下の
 忍ばした勢だから、氣焰と、殺風景推して知るべしだ。……酒氣が天井を衝くので
 はない、陰に籠つて疊の焼けこげを轉げる。あつ爛で火の如く悪酔闌なる最中。お
 連様つ——と下階から素頓興な聲が掛ると、「皆居るかい。」と言ふ紅葉先生の
 聲がした。まさか、壺皿はなかつたが、驚破事だと、貧乏徳利を羽織の下へ隠すのが
 ある、誂子を股へ引挟んで膝小僧をおさへるのがある、鍋へ盃洗の水を打込むのが
 ある。わがしを股へ引挟んで膝小僧をおさへるのがある、鍋へ盃洗の水を打込むのが
 ある。私が手をつけて畏まると、先生にはお客分で仔細ないのに、宙外さんも
 煙に巻かれて、肩を四角に坐り直つて、酒のいきを、はあはあと、専らピンと撥ねた髯を
 揉んだ。

處へ……：せり上つておいでなすつた先生は、舞臺にしても見せたかつた。すつき
 り男ぶりのいゝ處へ、よそゆきから歸宅のまゝの、りうとした着つけである。勿論留守

を狙つて泳ぎ出したのであつたが——揃つて紫星堂（塾）を出たと聞いて、その時々の弟子の懐中は見透しによく分る。明進軒か島金、飛上つて常磐（はこがは）と云ふ處を、奴等の近頃の景氣では——蛤鍋と……當りがついた。「いや、盛だな。」と、缺け火鉢を、鐵火にお召の股へ挟んで、手をかぎしながら莞爾して、「後藤君、お樂に——皆も飲みなよ、俺も割で一杯やらう。」殿様が中間部屋の趣がある。恐れながら、此時、先生の風采想ふべしで、「懐中はいゝぜ。」と手を敲かゝる。手に應じて、へいと、どしんくと上つた女中が、次手に薄暗いからランプをつけた、釣ランプ（……あゝ久しいが今だつてランプなしには居られますか。）それが丁ど先生の肩の上の見當に掛つて居た。面疱だらけの女中さんが燐寸を摺つて點けて、挿ぼやをさすと、フツと消したばかり、まだ火のついたまゝの燃さしを、ポンと斜つかひに投げた——（まつたく、お互が、所帯を持つて、女中の此には惱まされた、火の用心が悪いから、それだけはよしなよ。はい、と言ふ口の下から、つけさしのマツチをポンがお定まり……）唯、先生の膝にプスツと落ちた。「女中や、お手柔かに頼むぜ。」と先生の言葉の下に、ゑみわれたやうな顔をして、「惚れた證據だわよ。」やや、と皆が顔を見る。……「惚れたに遠慮があるものかツてねえ、……てね、……ねえ。」と甘

つたれる。——あ、あ、あ危ない、棚の破鍋が落ちかゝる如く、剩へたくと崩れて、薄汚れた紀州ネルを膝から溢出させたまゝ、……あゝ……あゝ行つた！……男振は音羽屋（特註、五代目）の意氣に、團十郎の濫味が加つたと、下町の女だちが評判した、御病氣で面瘦せては、あだにさへも見えなすつた先生の肩へ、……あゝ嘸りついた。

よゝつツと、宙外君が堪まらず奇聲と云ふのを上げるに連れて、一同が、……おめでたうと稱へた。

それよりして以來——癩癩でなく、憤りでなく、先生がいゝ機嫌で、しかも警句雲の如く、弟子をならべて罵倒して、勢當るべからざる時と言ふと、つゝき合つて、目くばせして、一人が少しく座を罷り出る。「先生……（水）……」「何。」「蛤鍋へおともは如何で。」「馬鹿を言へ。」「いゝえ、大分、女中さんがこがれて居りますさうでございまして。」「傍から、「えゝ煩つて居るほどだと申します事ですから。」「……かねて、おれを思ふ女ならば、目つかちでも鼻つかけてもと言ふ、御主義？であつた。——

紅葉先生、その時の態度は……
 采菊 東籬下、

悠いぜんとしてなんざんをみる。
然ぜん見し南なん山ざん。

大正十三年一月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

※題名の下にあった年代の注を、最後に移しました。

※表題は底本では、「春着《はるぎ》」とルビがついています。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2011年8月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

春着

泉鏡太郎

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>